	＊友だちとあそび、じっくりと一人であそぶ等を支える	
10：30～	・クラスでの活動	
	＊集まりの声かけは、子ども自身が気持ちを切り替えられるよう配慮	
	＊月カリキュラムに基づく保育活動	
11：45～	・昼 食	
	＊短時間保育園児：家庭から持参したお弁当 長時間保育園児：厨房で用意したお弁当	
	＊食前のお祈りをして、各テーブルごとに食事　楽しく食べられるように	
昼食後～	・おもいおもいのあそび	
	＊昼食後は、保育室や園庭でのあそび 午前中のあそびの続きや、一人でゆっくりあそび　見守りを大切に	
	・降園前のあつまり（気持ちを静める） 今日一日のことをみんなで話し、自分なりにしめくくる 絵本をともに楽しみ、共感する「とき」をもつ 神さまに感謝のお祈りをして降園	
14：00	・降 園 保護者のお迎えが来た順に降園	・ひかりのこにじのへやに移動 荷物の整理　それぞれのペースで
		・午 睡（休息） 午後の活動に向けての休息をとる 部屋は真っ暗にしない
15：30		・補 食（軽食） 夕食までの食のリズムを配慮 手づくりメニュー（厨房で調理） 楽しい会話を
16：00		・おもいおもいのあそび 個々の体力、リズムを配慮 ＊自分なりのペースであそびを充実させる ＊クラスでの活動やあそびの続きを友だちと楽しむ
17：00～		・順次降園開始 保護者のお迎えの「とき」を大切に
18：30	・保育終了	

⑱認定こども園 こどもむら

①幼保連携型／学校法人

②埼玉県久喜市伊坂46

③人口：約155,550人

④定員230人　保30人、幼200人

⑤園長　柿沼 平太郎

①認定こども園の類型／法人種②所在地③所在地域の人口④定員⑤代表者名

◇地域の概要

久喜市は関東平野のほぼ中央に位置し、北東側に利根川、南西側に元荒川が流れます。2010年3月に1市3町による合併により新久喜市として歩みはじめ3年が経過しています。園が立地する栗橋地区（旧栗橋町）は、古くは日光街道の要衝として箱根・碓氷と並び日本3大関所の1つとして栗橋関所が置かれ、古くから人やもの、情報が行き交う場所として発展し、宿場町として栄えてきました。現在はかつての面影はなく、水田と住宅地が広がる小さな街となっています。子ども環境においては、合計特殊出生率が1.09（2011年）と全国平均を大きく下回り、少子高齢化の流れが進んでいます。市内でも過疎地域と新興地域では子どもの数も大きく異なり、子ども集団が確保されにくい地域も増えています。

◆認定こども園をめざした理由

子ども・子育て中心の街づくりをめざして

午睡

本園は、1975年より37年間私立幼稚園として地域の幼児教育を担ってきました。しかし、10数年ほど前より少子化の影響が色濃く表れはじめ、園児減が深刻になりはじめました。それと同時に多様な子育て家庭への対応も急務となり、園の空いた保育室を利用して、1、2歳児を対象とした認可外保育所を創設し、月極保育と一時預かり保育を開始しました。また、

在宅子育て家庭のための子育て支援事業も活発に行ってきました。

そのような背景の中で活動を行ってきましたが、年々変化する保育ニーズに対応し、家庭環境を問わずに私たちの保育を提供するには、しっかりとした児童福祉の機能をもち、パブリックな存在とならなければなりません。そこで、安定的、発展的に保育をし、子育て支援を充実させるために認定こども園への一歩を踏み出すことにしました。学校教育と児童福祉、そして子育て支援機能をもつ認定こども園となったことで、地域との協働が生まれやすくなりました。私たちの園では、特に子育て支援センター、絵本の図書館、子育て公園を中心とした子育て支援機能を強化し、子どもと保護者の居場所をつくるとともに、地域の農家や商店、医療機関、高等学校等と連携、協力体制を築くことで、子どもと子育て家庭中心の街づくりを進めています。

1 園の生活 ⒶⒹ

幼稚園機能と保育所機能

園舎

こどもむらは、現在0～2歳児の生活する『さくらのもり保育園』と3～5歳児の生活する『栗橋さくら幼稚園』の年齢区分型の認定こども園となっています。園舎は、約50ｍ離れているため、0歳から5歳までの子ども同士のかかわりや育ちの連続性を確保するために、幼保の職員が知恵を出し合い工夫をしています。

開園時間は、幼稚園、保育園とも7時～19時になっているので、3～5歳児の長時間保育を必要とする園児は、朝8時半までは保育園で0～2歳児とともに生活し、先生と一緒に「いってきます」と幼稚園に向かいます。日中は幼稚園でクラスや異年齢での遊びや活動を行い、夕方は16時半になると「ただいま～」と保育園に帰り、まるで大きな家の中で0～5歳児がきょうだいのような関係で毎日を過ごしています。また、日中は5歳児が0～2歳児をお迎えに行き、一緒に幼稚園の庭で遊んだり、庭で採れた果実や自分たちで調理したおやつを保育園の子どもたちにおすそ分けに行くなどして、0～5歳児のかかわりや育ち合いの時間を大切にしています。

2 子育て支援事業 Ⓑ

(1) 子育て支援センター『森のひろば』

『森のひろば』は0～2歳児の子どもと保護者の方が登録をしていただければ自由に利用できるスペースとなっています。毎日9時～14時半まで開館しており、親子でゆったりとした時間を過ごすことができます。森のひろばには、ままごとやブロック、お絵かきやプリオなどのコーナーのあるスペースのほかに、授乳室、ベビールーム（調乳室、親子トイレ等）、0歳児室、多目的室があり、お昼寝用の布団の貸出し等も行っています。

多目的室では、園の看護師による健康相談や管理栄養士によるアレルギー相談、離乳食講座などが行われ、子育てに対する悩みも相談することができます。また、お昼が近づくと多目的室はランチルームに大変身します。毎日行われるティータイムのほか、週に1度予約制でランチサービスも行われ、親子で園のキッチンで作られた食事を試食することもできます。さらに、月に2回ほど園の看護師による健康相談や管理栄養士による栄養相談なども受けることができます。

森のひろばは、学園の理念である「ここにいるっていいね、いっしょにいるっていいよね」を体現できるような、子どもも保護者も自分のペースでゆったりと生活できる、子育て家庭のための「街の居場所」をめざしています。森のひろばや森の図書館開館の準備は、園の保護者のボランティアの方々と一緒に行いました。

(2) 絵本の図書館『森の図書館』

『森の図書館』は、森のひろば内にあり、1,500冊以上の絵本と子育て関連本を揃えた図書館です。ソファやウッドデッキのスペースもあり、春は満開の桜を見ながら親子で絵本に親しむことができます。また、子どもを膝の上にのせたり、肩を寄せ合いながら読んであげることは、言葉はもちろん、肌と肌でのコミュニケーションにもなります。親子の愛着形成をしっかりともつためにも、図書館の提供は重要であると考えています。月刊の女性誌や料理の本も充実させていて、普段なかなか雑誌等を読む時間のない保護者の息抜きの場にもなっています。

(3) 子育て公園『あそびの森』

森のひろばから土間を通って外に出ると、そこには子育て公園『あそびの森』が広がっています。近隣に安心して遊べる公園や遊び場がないために、子どもと子育て家庭だけのために公園を整備しました。『あそびの森』は、自然環境での遊びが大きなコンセプトとなっていますが、砂場や築山、すべり台なども備え、安心してのびのびと遊べる環境となっています。春には満開の桜の中でお弁当を食べるなど、心も身体も元気になる空間が広がっています。

3 地域との架け橋 Ⓓ

ビオトープ『じんだんぼうのやま』でのワークショップ

こどもむらには、ビオトープ『じんだんぼうのやま』があります。1,500㎡の広さをもつ『じんだんぼうのやま』には、メダカ、ドジョウ、タニシ、カミキリムシやバッタ、カエルにヘビなど様々な種類の生き物が集まってきています。キキョウやムラサキシキブ、ニホンタンポポ等の珍しい植物にも出合え、子どもたちの心を揺さぶる命との出合いの場となっています。そのビオトープで、自然遊びワークショップや自然観察学習会等を行っています。園児だけでなく、地域にも呼びかけを行い、地域の小学生等の参加もあります。自然学者の先生や生態系協会の専門家、プロナチュラリストの方々が講師となり、子どもにとってなぜ自然体験が大切なのかを体験を通じて保護者や地域に伝える貴重な機会になっています。

4 研修・研究体制 Ⓒ

研修風景

こどもむらでは毎年、幼稚園・保育園、常勤・非常勤関係なく、全職員で保育・教育課程を作成します。その後、学年別の年間指導計画や年間予定は、主任や学年のリーダーを中心に担当教諭・保育士で話し合い、その内容を再度全体で共通理解を図ります。0～5歳児までの連続性や育ちの理解を共有するには絶対に必要な作業となります。

また、0～2歳児と3～5歳児で建物が離れた場所にあるために、意識的に保育のつながりを考えなければなりません。生活の場所が異なるため、現在、早朝保育（7時～8時半）と預かり保育（16時～19時）は保育園での生活となります。そこで大切になるのは、連絡事項の伝達や子どもの様子の引き継ぎや情報交換になります。この部分は、最も多く失敗を重ねながら、徐々に形になってきたところだと思います。

職員のつながりでは、幼保両方の職員から構成される3委員会があります。1、安全管理委員会、2、健康衛生委員会、3、環境美化委員会です。施設ごとに個別の対応をするケースもありますが、基本的にはこの3委員会が両方の施設の管理を行い、月に数回話し合いがもたれます。

保育の面では、これも幼保両方の職員で構成されている遊びプロジェクトがあります。6チームに分かれ（全職員がどこかに所属）、環境遊び、自然遊び、運動遊び、音楽遊び、造形遊び、食育と0～5歳児の遊びを考

えます。そのチームの年間案を学年の指導計画にすり合わせていきます。

研修

研修面ですが、園内研修は幼保合同で行います。全員参加が基本となりますが、職員の生活も多様ですので、参加できなかった者にはフォローを行います。園外研修（視察等）については、全員で行けない場合は幼保からバランスよく選び研修に臨みます。共通理解はもちろんですが、空気や思いの共有は一緒にその場にいないと深まらないと考えています。

保育園、幼稚園、子育て支援センター等の名称はどうであれ、必要なのはそれらのもつ機能なのだと思います。これだけ多様な育ち、家庭環境があるのですから、それを受け入れる施設も多様化しなければいけません。施設のすみ分けではなく、施設の多様化が社会からは望まれているのだと考えています。家庭環境や育ちの環境が異なっていても、子どもへの思いは大きくは変わらないでしょうし、どの子も質の高い保育・教育を受ける権利があるのです。

認定こども園になって、その多様化する子ども環境に対応できるようになり、私たちとしても大きな成長を感じさせていただいています。これからも地域とともに、子ども・子育て中心の街づくりをめざし、すべての子どもの最善の利益のために努力していこうと考えています。